

Title	書評：笠原清志著 『社会主義と個人：ユーゴとポーランドから』 集英社新書、2009年
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.115- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：笠原清志著

『社会主義と個人—ユーゴとポーランドから』集英社新書、2009年

有末 賢

『社会主義と個人』というテーマは、1960～70年代に青春時代を送った現在50～60代のある人々にとって魅力的なテーマである。著者の笠原清志氏は、1978年から2年間ユーゴスラヴィアのベオグラード大学に留学している。1960～70年代は、笠原氏が高校、大学、大学院時代を過ごした時期でもある。著者は、本書では何も語ってはいないが、「社会主義と個人」と言うテーマは、当時の社会状況、若者の思想形成などと深く結び付いているものと推測される。私もほぼ同世代の人間であるが、1968～69年の大学闘争、学生運動、68年の「プラハの春」とソ連軍による侵攻、中国の文化大革命、反スターリン主義やトロツキスト、日本の連合赤軍事件・・・などなど、「社会主義と個人」というテーマは、運動に関わった人もそうでなかった人も切実な問題として意識されていた。

本書は、1989年の東欧・中欧の社会主義体制の崩壊を経て、ユーゴスラヴィアとポーランドという二つの異国の「ふつうの人々」にとって、社会主義とは何だったのか？を問いかける内容である。もちろん、日本からは「遠い国の話」として読むこともできるが、社会主義革命や社会主義がある種の若者たちにとって魅力を保っていたあの時代の日本にとっても、「社会主義と個人」というテーマはリアリティを持っていた。運動における党（パルタイ）の優位、労働者階級の意志決定としてのプロレタリア独裁の是非、変革思考の組織化とスターリン主義、内ゲバの論理など革命的運動が次第に暴力やテロと境目がつかなくなってくる様相は、資本主義諸国にとっての「社会主義と個人」のテーマにもつながっている。

しかし、本書は難しい理論が出てくるわけではない。笠原氏の人柄からか特に第1部のユーゴスラヴィアについては、ベオグラード大学への留学時代に出会ったイダ・サビッチさん、エミリアさんと夫の“ヨツァ”さん、マリア・ビダックさんとピイドウさん、外交官のネナド君などまさに個人・個人が生き活きと描かれている。笠原氏は、日本から来た人の良い留学生という役柄で接しているが、すでに、パルチザンの元闘士とかソ連派、政治犯、「白い貴族」などユーゴの事情がからんでくるのである。その中でも、最も悲劇的なのは、在日ユーゴスラヴィア大使館で一等書記官として働いていたネナド君が1990年夏に頭の皮を半分剥がされ、ドナウ川に死んで浮いていた、というニュースである。ユーゴの自主管理型社会主義の崩壊後に民族主義が台頭し、内戦へ展開していった歴史は有名であるが、ネナド君の「痛ましい死」という個人の具体的な事件から読み解いていくと、「どうしてこんなことに・・・」という思いが込み上げてくる。笠原氏は「今にして思えば、戦後のユーゴスラヴィアは事実と歴史を直視せず、

民族間の負の遺産については政治的な処理を施すことで対応してきたと言わざるをえない。このような対応によって、各民族の怨念を、とりわけセルビア民族の怨念を心の深層の部分で肥大化させてしまっていたのかもしれない。しかし、多民族がモザイク的に交錯して存在するユーゴスラヴィアにおいて、他にどのような戦後のスタートが可能であったろうか。民族間の和解の道を考えたとき、ポーランドのような対応が果たして可能であったろうか、という問いは残る。」(85 頁)と書いている。

第 2 部のポーランドでも、笠原氏はヤン・マラノフスキ教授との出会いや 1989 年 8 月、すさまじいインフレの進行という歴史的瞬間にワルシャワに滞在していた実感が語られている。「ポーランドの戦後の歴史は、周期的な労働者の暴動と社会的危機の繰り返しであった。民衆レベルでの体制拒否反応は、ポーランドにおけるソ連型社会主義の機能不全を示すものであるが、根底にはポーランド国民の激しい怒りというものが存在していた。それは、自らの民族的文化と伝統を、社会主義というシステムによって破壊されてしまったことに対する怒りであり、そのプロセスでヒトラーと同様にポーランド人を抹殺しようとしたスターリンやソ連への怒りでもあった。」(123 頁)と書かれている。

レフ・ワレサの「連帯運動」の軌跡や 1990 年のワレサ大統領の登場、その後の旧共産党勢力の復活などを概観した後、笠原氏は、1992 年夏から、権力の座を追われた旧体制派の人達の追跡調査というユニークな調査をポーランドで行った。「社会的に孤立し、肉体作業の現場で糊口をしのぐ者、故郷の農村に帰っていった者、生活苦から自殺した者、かつての仲間のネットワークからも消えていった者・・・身の処し方はそれぞれであったが、すべての人達が必死に新しい生活の場を見出そうとした。F 氏のように、生活を支えるために市場経済の申し子のようなマフィアとの接点に立たざるを得なくなった人もいたのだ。」(171 頁) このように笠原氏は、社会主義体制の後の「個人」を追っていく。

笠原氏は、「私は大学院に進んだころから、日本人を市民という言葉で語ったり、理解しようとすることに、ある種の違和感を持ち始めていた。」(10 頁)と書いているが、ユーゴやポーランドの体制変革の検討を通して、さらに深まっていく。「旧社会主義国では、民主化の後に、過去と向き合い、その体制の責任を問う政治プロセスが存在した。しかし、このプロセスを民主主義のルールの下で行うことの困難さや、過去を現在の基準で裁くことの限界が明らかになると、いつの間にかうやむやにされてしまった。それは、自らも生きた過去を結局は誰も相対化しえない、ということなのかもしれない。」(216 頁)と述べた後に、「この問いかけは、人々それぞれの立場の逆転を意味し、過去との関係で自らを相対化することを求める。つまり、市民一人ひとりが被害者ではなく、場合によっては加害者として過去の体制と向き合うことを求められるということなのである。」(219 頁)という厳しい姿勢を結論としている。

笠原氏は、「あとがき」で「時が流れ、人は逝く。人はどこから来て、どこへ行くのであろう、と思うことがある。」と述べているが、私が笠原氏のこの本の事を知ったのは、実は昨年 10 月に急逝された慶應義塾大学文学部教授：藤田弘夫氏の「偲ぶ会」の席上であった。笠原氏と藤

田氏は大学院時代からの親友関係であった。笠原氏は、昨年 11 月に文学部主催で開かれた「偲ぶ会」に出席できなかったこともあって、今年の 3 月に再び、こじんまりした「偲ぶ会」を主宰された。笠原氏の「同年代の仲間を亡くした後の心の整理をつけたかった」という思いが、この『社会主義と個人』を読むことで、私にももう一度よみがえってきた。故藤田弘夫氏に対するオマージュでもあったのかもしれない。

[本体価格：720 円＋税]

(ありすえ けん 慶應義塾大学法学部)